

今回の「CHAT」では、前半で、去年十二月に掲載する予定だった「宇宙留学」を紹介いたします。楠中学校に入学する前に現楠中学生の山田慈瑛さん(中二)、中井真之介さん(中三)にお話を伺いました。後半では、中学生徒会生活委員長の柘夏輝さん(中二)の文章を掲載しています。納得のいく記事となりました。読んでいただける幸いです。

# 宇宙留学

山田慈瑛さん(中二)や、中井真之介さん(中三)が楠中に入学する前に行った「宇宙留学」。そもそもどんな留学だろうと思ひ、調べてみることにしました。するとインターネット上では、南種子町の教育委員会が行っている山村留学制度のことが記載されていました。親元を離れて日本で一番宇宙に近い町「種子島」で一年間、南種子町内の小学校に通います。実際には、山田慈瑛さん(中二)や中井真之介さん(中三)はどちらとも小学校四年生の頃に行ったと話していました。定員は五〇人程度なため、常に種子島には五〇人の宇宙好きな児童が全国から集まっていることになりました。ちなみに小学校四年生以上は、宇宙科学少年隊に入団し、宇宙に関する知識などを学べるため、より専門的に宇宙を知ることが出来ます。二人も当時小学校四年生だったため、この宇宙科学少年隊に入団していたことになりました。一年間、町の人たちとたくさん交流すること、より一層コミュニケーション能力や自立心や育まれたのだと思います。「宇宙留学」。この貴重な経験は二人の人生において大きな糧となったのではないのでしょうか。私も小さい頃の経験などを大きなバネにし、これから起こるどんな事態にも対応していきたいです。

# 動画配信サービスは善か悪か

～原田智行、映画館の魅力を語る～

一月二三日、南日本新聞の広場欄、若い目に中学二年生の原田智行さんの「映画館という空間」が掲載されました。本人は「まさか僕の文章が載るなんて！」と驚いている様子でした。緊急で出された課題だったので、その対応力や文章力には、我々は彼を尊敬すべきだと思ひます。今回は、その文章を紹介いたします。  
〈梅木〉

「最近、動画配信サービスなどで独占配信される映画が増えていく。しかし僕は思う。やはり映画は、映画館で見るべきものではないか。」

監督が見せたいもの、作りたいものを役者が演じ、それを編集し音楽をつける。その映画を作った人たちの努力を、自らの足で見る。

「映画鑑賞」だと思ひ。独占配信などは、その会社の企業戦略などでしかたないと思ひが、それだと映画を作った人たちに少し申し訳ないと思ひ。

動画配信サービスはとても便利だと思ひ。古い映画も新しい映画も、ジャンルを問わずたくさん見れるのですばらしいと思ひ。が、監督の思ひが真に伝わるのは映画館だ。館内の独特の雰囲気、素材、音響、様々な相まって映画というものが出来る。そんな映画館という空間と、家で見る映画というのは何倍も重みが違う。

自分の人生を変えるほどの映画と出会う場所は、自分の家ではなく映画館がいいなと思ひ思ひ。』  
引用 一月二三日南日本新聞より

# 仰げば尊し〜飯田先生〜

令和の時代

楠中学校での勤務も五年目を終えようとしている。この五年間で、楠中学校は大きく変容を遂げた。

楠中を創り上げてきた時期が懐かしいと同時に、もう一度同じ経験は遠慮したいくらい大変だった。如何せん、すべてが初めてだった。世の「開拓者」と呼ばれる人々の偉大さを痛感した。

この五年間で、世の中も平成から令和へと変わった。後生の人々が平成をどう評価するのか楽しみではない。素晴らしい時代だったのか、つなぎの時代だったのか。個人的には、どこへ向かうべきか模索した時代だった気がする。

大災害があったにもかかわらず、被災するエネルギー問題。民主主義の根幹に関わる投票率の低下。リーダの言動が物議を呼ぶ某大人名を連呼する曲がヒットする現実。流行のモノが最良であるかのような

価値観。溢れる情報に翻弄され、自ら思考し判断する時間さえなく、何かに追われ、急がされていた気がする。それにもかかわらず、テレビのキャラクターに叱責され、国際社会においても少女に非難される。自分が懸命に生き抜いた時代が何だったのかその答えが知りたい。

これからの令和の時代、答えがない前提で生きていかなければならない。答えを求めている時点で、自分は旧タイプなのだろう。君たちは違う。ニュータイプだ。新たな時代を創り上げ、生き抜いてほしい。

こんな自分にできることは、追われず、急がされず、幸せに生きることである。笑顔で生きることが出来る。これだけモノが豊かな時代に、幸せ指数が低いことが解せぬ。一人一人が幸せを感じ、幸せだと言いつける令和になって欲しい、してほしい。

そのためには、まず自分とそのための人が幸せを感じられるような人生を送りたい。ともに送ろう。

# 【編集後記】

明けましておめでとうございます。今年度も残りあと三回の発行となりました。新年早々私も広報委員長として今年新たな取り組みを実施していきたいと考えています。その一つは、去年と同様、新聞製作の効率化を目指して期日を守ることが出来なかった。改めてこのことを目標として掲げたいと思ひます。もう一つは、生徒会執行部の活動のサポートです。生徒会新聞だけでなく学校に関わる様々な場面で実績を残していきたいと思ひます。新学期も始まり、部活や校外模試などで忙しい時期になりました。生活のリズムや体調管理に気をつけて充実した毎日を共に送っていきましょう。

令和二年度 一月生徒会新聞 発行責任者 梅木岳人

現代社会において漫画家が締め切り日ぎりぎりになって必死で描き続ける緊迫感が漂う状況や場のことを「修羅場」という。しかし、「修羅場」はもともと、仏教で阿修羅と帝釈天が闘争繰り返す場のことで、敵対する者どうしの間で命がけの激しい戦闘が繰り広げられている場や様子を「修羅場」と表現していたのである。

さて、この文章を読んでいるあなたに考えてほしい。なぜ、締め切り日寸前になった状況の中、必死で描き続ける緊迫感が漂う場のことを「修羅場」と呼ばれるようになったのかを。ここからは予想だが、このように呼ばれてしまう理由の一つに計画性の無さがあると思ひ。

計画なしに依頼を受ける。

計画なしの時間を使う。

その結果、締め切り日ぎりぎりまで終わる。あるいは、その日を過ぎてしまう。というような状態が出来上がってしまうのだ。

そして、その状態を打開するために漫画家が本気で原稿に挑む様子が凄まじい。